

歴史の交差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之



ガザの軍事衝突は、イスラム過激派武装組織ハマスによるシオニスト国家への武力的抵抗とそれの掃討戦なのだろうか。あるいは、欧米やイスラエルのいうテ

民に統治責任を担っているハマスが、隣国イスラエルに無差別攻撃を仕掛けて人質を拉致した点にある。イスラエルの報復攻撃ではガザの一般市民に多数の

犠牲者が出た。ハマスが同胞の犠牲を斟酌した形跡は少ない。責任をイスラエルに押し付けるのは、イデオロギーとして簡単極まりないが、ガザ統治を担う政治主体としてのハマスの責任はどうなるのだろうか。限定的とはいえ曲がりなりにも自治主権を認められたパレスチナ国家の一部が、領土を隠れみのにしながら隣国市民に無差別攻撃を繰り返すなら、イスラエルとパレスチナの共存を目指したオスロ合意（1993年）を含め中東諸国がこれまで努力してきた競争的共存を正面から否定したに等しい。ハマスは、イスラエルと湾岸諸国との間に結ばれ、やがてサウジアラビアも参加するアブラハム合意の行く末を見て、パレ

ガザ戦争の理屈

スチナの孤立だけでなく、それを妥協と取引の材料にした平和合意の偏狭な性格を国際世論に訴えたかったのかもしれない。

しかし、イスラエルによるオスロ合意無視やパレスチナ領への人植地建設に非があるにせよ、開戦事由を開示もせず、いきなり大量のロケット弾を市街地に雨あられとばかりに浴びせるのでは、国際的にも批判を免れない。パレスチナ市民に同情的だったフランスなどの欧州世論やインドまで、イスラエルの自衛権をむしろ認めたのは不思議な

ところだ。ところで、イスラエル軍の地上戦突入はガザの一般市民に多数の犠牲者を出すことだろう。食い止めるには、いずれかの有力国による調停が必要となる。中東でその力を有するのはイラン・トルコ・サウジアラビアの3カ国である。イランはハマスの後援者であり、不倶戴天の敵イスラエルは受け入れない。トルコもイスラエルに批判的な立場を隠さない。サウジアラビアなら両方にパイプを持つが、アブラハム合意に入り

歓迎しないかもしれない。そこでワイルドカードが一枚残るのだ。その最適な候補はエジプトであろう。これまでもガザ紛争の調停に実績があり、シナイ半島への難民流入を歓迎できない死活の利害もある。イスラエルは簡単な妥協を拒否するだろうが、エジプトなら交渉チャンネルをひとつ作れる。このままではイスラム国（IS）と同一視されたハマスを待ち受けるのは、玉碎への道と灰燼に帰すガザの不幸な姿にほかならない。 || おわり (やまうち まさゆき)